

特集 この人に聞きたい

中学校教育に望むこと

日本大学理事長
作家

林 真理子 先生



林 真理子（はやし まりこ）先生（略歴）

一九五四年

山梨県生まれ。
日本大学芸術学部卒業後、コピーライターとして活躍

一九八二年

エッセイ集『ルンルンを買っておうちに帰ろう』が処女作にしてベストセラーとなる。

一九八六年

『最終便に間に合えば』『京都まで』で第九回直木賞を受賞

一九九五年

『白蓮れんれん』で第八回柴田錬三郎賞を受賞

二〇一一年

フランス政府よりレジオンドヌール勲章を授与される。

二〇一八年

『西郷どん！』がNHK大河ドラマ原作になる。同年紫綬褒章受章

二〇一九年

「元号に関する懇談会」メンバーとなり、新元号制定に関わる。

二〇二〇年

日本文藝家協会理事長に選出される。同年、第六八回菊池寛賞受賞。また、週刊文春で連載のエッセイの通算連載回数が一六五五回に達し、「同一雑誌におけるエッセイの最多掲載回数」としてギネス世界記録に認定される。

二〇二二年

日本大学理事長に就任。同年、第四回野間出版文化賞受賞。

*歴史小説、現代小説、エッセイと幅広い作風で活躍している。近書に『小説8050』『李王家の縁談』『奇跡』『成熟スイッチ』がある。

編集部 この度は、貴重な機会をいただきありがとうございます。

全日本中学校長会では、毎月、機関誌「中学校」を刊行していて、全国に約九、〇〇〇ある公立中学校の校長先生が読者です。十月号で「この人に聞きたい」という特集を組んでおり、林先生に「中学校教育に望むこと」という大きなテーマの中で、お話を伺いたいと思います。

林 中学校というのは一番難しいときですよ。大人への入り口、子供の終わりの一四歳、不登校、ひきこもりを始めるのが一四歳だとおっしゃっている教育者の方もいます。高校生になれば社会性も出てくるし、ばかなことをしたら

自分の損になるだけだと分かりますけれども、中学校は大変だと思います。



編集部 確かに、中学生というのは本当に難しく、子供たちの答えがなかなか出てこない。僕らも何が答えか分からない。探りながらやる場所がありませんね。

では、初めに、日本大学という巨大な組織の中で、火中の栗を拾うような形で一年前に理事長になられました。そのときのお気持ちを聞きできればと思っております。

林 本日に青天のへきれきでした。こういうことを言うとう誤解を招くかもしれませんが、ちょっと面白そうかなという感じはありましたね。違うことをやるのは楽しいかもというのと、女性だと今までのイメージをがらっと払拭できていいかもしれないと思いました。

本当に巨大な組織ですし、会議をやっているだけで日が暮れてしまうようなこともあります。楽しいこともいっぱいありますね。自分の考えをどうやって通そうかということを考えて、もちろんトップダウンは全く利かないようになっていきますから、「こんなことを思いついた、やりたいな」と言うだけでなく、どういうふうにするのかということをいろいろな会議にかけないといけない。こつこつやって承認を得ていかないと全く進まないわけです。それでも何かを実現するというのは楽しいなど。また、教職員の人たちと、こうしたいあほしいということ話すのも非常に楽しいなと思っています。

編集部 組織を動かしていく中で林理事長が一番大事にさ

れていることはどんなことですか。

林 人の話をよく聞くということと、絶対その人を否定したりしないこと。それから、好悪の情をもたないことです。例えば、誰かひいきをつくったり、あの人は嫌だと言ったりするようなことはしないように心がけています。辛いなことに、私は作家なので、この人は何でこんな変なことを発言するんだろうと一瞬思ったとしても、こんなことにこだわって面白いなとか、様々な人を受け入れることができるので、嫌になるということはないですね。

編集部 今までの組織を変えていくときに、合意形成をするとか、新しい形を提案するところで難しい局面はありましたか。

林 いろいろな学部の人たちがいて、トップの人たちというのはプライドもありますから、「こうしたら？」と言ったところで、言うことを聞いてもらえるようにするのは大変なことだと思います。

編集部 そういう方向にもっていくというか、同じ土俵に乗って考えてもらうための戦略とかやり方というのはありますか。

林 思いも寄らないようなことを言うということもありま

す。でも、それが本当に奇想天外なことなのか、荒唐無稽なことなのか、まず考えてもらって、最初はみんなできないと言っただけでも、数字を見せたりいろいろなことをやったりすることで、「できないこともないかもしれないよ。」ということが進めることができると思います。

この間も会議で、「思いつきですよ。そんなこと言わないでください。」と言われたんですけども、「思いつきじゃないですよ、これは必要なことですよ。」と言って議論を進めたことがあります。現場にいる人たちはプライドも高いですから、そういう方たちを決して否定したりはしない。

編集部 否定しないで、なおかつ、この先の組織にはこういうことが必要じゃないかということですね。

林 「私が日大に来たからには、面白いことを一緒にやりましょうよ。」ということは皆さんに言っています。「昨日と同じことをやっていてはつまらないから、新しいことをやってみませんか、一緒にやりませんか。」というようなことは言っていますね。

例えば、外部の人との打ち合わせの場でも、若い職員を同席させて、一緒に面白いことを作り上げようというよう

なことは前からやっていたんですけれども、私の考えがうまく伝わらず、「理事長が勝手にやっている」と感じている人もいるかもしれません。でも、十人いたら一人か二人は一緒にやっていこうという人も出てくるから、そういうことでこつこつやっていくしかないと思います。

編集部 こつこつやってきて、それで今いろいろなつながりができていろいろなものが動いていく、そういう立場になってきたと著書の中に書かれていましたが、そういうことは組織を動かす中でも通じるものがあるのですか。

林 あると思います。大学には週に三日ぐらい行っているのかと言われるのですが、特に最初の頃は、できるだけ滞在表示のランプをずっと光らせておくことを大切にしました。教職員に、ちゃんと朝から夕方までいますよということを示さなければと思ったからです。そこからみんなの信頼を得るといふのをこつこつやることは大切だと思うんです。いきなりスタンドプレーで、すごいアイデアを出して何かをするということはこの学校にはふさわしくないし、私は割と協調性のある人間なので、みんなの意見も聞きながらいい方法を探ろうとするし、とにかく人との

会話を大切にします。そういうことを一番大切にしています。

編集部 先生の本を読んでいると、相手の思いをきちっと受け止めて大切にする、それで人間関係をつくって、それが大きくなって物事が動いていくというのが随分いろいろなところで出ているなど思うんですけれども。

林 まだ大したことをしているわけではないのですが、この教職員は優秀でプロフェッショナルな人たちが多いので、そういうのはきちんと認めて何かやってもらおうということが大切だと思う。今まで責任をもってやっていたいなかったということもあったみたいなので、そういう人たちも巻き込んでいくというのは大切だと思うし、常務理事にしても、とても優秀な方たちにそれぞれの担当を任せており、これは我ながらうまくいったと思っています。皆さんよく協力してくださって、いい感じに動いているので、うまくいっているなという感じですよ。

編集部 先生がいろいろなアイデアというか、方向性を提案されるのですか。

林 ちよつとアイデアを伝えると、適切な企画書を作ってくれたり、予算も立ててくれたりして、すごくありがた

いですね。

編集部 私たちも校長なので、小さな組織ではありませんけれども、そのトップで、学校を経営、運営していく中では、職員の話の聞いたり引き出したり、ポトムアップで上がってくるものを指示を出しながら形にしていこうということが大事だと思うんですが、学校の職員あるいは学校の組織も同じだと考えるところはありますか。

林 行っていない学部もまだあるぐらい大きい組織で、学生も七万人近くいるので、一人一人とじっくり話をするのが難しいのは少し残念ですね。校長先生というのは楽しいと思いますよ。うちの付属校の先生たちを見ていると楽しそうだと思います。もっと楽しくしていただくのが私の使命だと思います。

編集部 今回、女性の理事を多く登用されていて、八人と伺っています。

林 そこなんですけれども、私が理事を選べてはいないんですよ。皆さん大きく誤解していらっしゃるんですが、私が推薦した理事は二人しかいない。あとは、学外、校友、教職員や付属校などから選出されてきた方なんです。そんな感じでいらしているんですが、それぞれの選出母体の皆

さんがすごく考えてくださって、日大の理事は女性がいいということ、女性の方を数多く推薦していただいたという感じです。

編集部 女性の理事がそれだけ入ったということで、メリットはどんなことがありますか。

林 非常に理事会が活発化して、こういう考え方もあるんだなと新しい発見がありますし、女性の理事の方の意見が面白いので、非常に参考になります。男性がつまらないということじゃなくて、すごく活発。女性はすごく発言などるので、最初は一回の会議に四時間ぐらいかかりましたけれども、それも一つの経過だと思っています。

編集部 そうした中で、林先生が考えるリーダーとしての資質というのはどんなことだと思いますか。

林 まず明るいということですね。明るくないリーダーは絶対駄目だと思う。それと、おおらか。大変なときでも、大したことじゃないとみんなの前で言い切る力、そして一緒に仕事をしている人を信頼しているということだと思います。

編集部 明るさというのは林先生そのものですね。だからこそ皆さんがついていかれるんだろうなと思います。

編集部 明るさというのは、もともと御自身の個性としてあったのか、それともどんどん磨き上げられてきたのでしょうか。

林 どんどん磨き上げられたと思う。

編集部 それはどういうことですか。

林 周りに面白い人がいっぱいいて、何か面白いことを言わないとついていけないというか仲間に入れないので、瞬発力というのが身に付いたなと思います。話を聞いているだけだと取り残されてしまうから、若いときに鍛えられたような気がします。

編集部 いろいろな作家の先生たちとの交流があつて、そこでいろいろ教えていただいたということでしょうか。林理事長も行動的というか積極的で、どんどん動いていくようなイメージがあります。

林 途中から自信が出てきて、人から誘われることも多くなりました。

今でもそうだけれども、食事の席に関係ない女の人を連れてくる人がいて、ああいうのはすごく腹が立つんですね。ここに来るまでに私はちゃんと努力もしたし時間もかけているから、そういう資格がない人を連れてこないでほしい

とはつきり言います。

編集部 ご著書の中に自己紹介もしない人だといってよく出てきますよね。

林 ああいうのをとても嫌いますね。

自分はまだそういう資格があるんだと気付いたときから、いろいろなところへ行くし、非常に行動的です。

編集部 先生はいろいろなものに興味があつて、興味のあることにはどんどんエネルギーに果敢に動いていかれると感じます。

林 一緒に御飯を食べると楽しいと、いろいろな人に、学者さんにも言っていただけ。何でだろうと自分なりに考えてみて、各分野の話題についていけるからだなど思っています。もちろん学者さんになうわけがないんですが、キャッチボールはできるんですね。そのキャッチボールがうまいんじゃないかなと思う。同じレベルで会話ができないけれども、受け答えというのがある程度何でもできるんじゃないかなと思つていますが、これは若いときからの好奇心のなせる技だと思つています。

それと、週刊誌の連載で対談を経験してきたのもよかつたかもしれません。学者さん、スポーツ選手、政治家など



様々な分野の人がいて、にわか勉強しながらでも何とか会話についていこうと思った。あれは勉強になりましたね。

編集部 広くいろいろなもの身につけないと対談できないですものね。話を聞いて関係をつくる、明るく接する、それがリーダーの資質。

林 まず明るい、気前がいい。

編集部 おおらかとおっしゃいましたが、幅広くやり取りができると物の見方が深く広くなるということですかね。

林 細心の注意を払って対処しなければいけないことと、大したことないよと言えること、そういう判断力もすごく大切。

編集部 すぐ手を打たなければいけないことと話を聞きながらじっくり進めていくこと、そういう見極め、判断力ということですかね。

林 時にはマスコミにマイナスの報道をされるのもしょうがない、何か言われたらまたはい上がるしかない、殺され

はしないんだからといつも思っています。

編集部 先生はいつもモチベーションが高いと思うんですよね。

林 高くないですよ。

編集部 この前もマスコミの報道がありましたけれども、そこではい上がるしかないと思切れる、それはモチベーションが高いからじゃないかと思うんですが、そうではないんですか。

林 過ぎたことはしようがないですよ。褒められっ放しの人なんているわけじゃないですから。日大も満身創痍ですけど、たたかれてたたかれて、マイナスをプラスにしていくしかないとも思っています。評価というものは徐々に高めなければいけない。たたかれっ放しでは駄目ですから、前のマイナス評価やマイナスの記事を覆すようなことを絶えず打っていかなければいけない。

ある女優さんが、半径一〇〇mの人に好かれていけば誰に何と言われたっていいですよと言っていたけれども、いろいろ書かれたり言われたりするのはいやがらない。それを覆す何かをやらなければいけないと絶えず思って生きてきたし、日大も同じですよ。マイナスの記事が出たら、

その一〇倍ぐらいのいい記事を絶えず送っていかねければいけないといつも思っています。

編集部 それは理事長になってからずっと思っているんじゃないんですか。

林 この一年ずっと思っています。この間の就任一年の記者会見でも言いましたけれども、昨年は後始末に明け暮れました。今年からやるよという感じでいろいろなことを仕掛けていますので、もうじき形になってくると思います。今は種をまいているところですね。いろいろ打ち合わせに行ったりして、忙しかったです。

編集部 日大の理事長のお仕事をされながら、週刊誌のエッセイを書かれたり小説を連載したり。どうやって時間を生み出しているのですか。

林 エッセイはそんなに時間がかからないからいいですけど、小説を書くとなると、海外や国内に取材に行ったりしていろいろな人と会う。取材は編集者に任せてしまおうかなとか思いながら、でも、やっぱり実際に行かないと駄目かな。

編集部 見て感じないと。

林 そこは難しいところですね。片手間じゃできないし、

作家業も理事長職もどっちも本当に大変。

編集部 幾つか拝読した中で、山梨の御実家は本屋さんを経営されていて、お母さんは教員もされていた、あの頃はたくさん本を読まれたと。

林 本で育っているようなところがあります。

編集部 それがベースになっているんですか。

林 生き方は、母親がベースになっていると思います。母親はとても厳しい人でしたので、私がいいかげんでだらしなくて勉強もしなくて、父親にそっくりだといってよく怒られていました。後年、「私に似てきた」とか言っています。決して満足のいく子供じゃなかったと思います。

編集部 お父様はおおらかな部分があったんですか。

林 おおらかでした。

編集部 お母様はとても勤勉な方なんですな。

林 すごい勉強家だったと思います。

編集部 小さい頃たくさん本を読まれた。大人になってからでもいいですし、その時々でもいいんですけれども、本を読むことの効果というか、活字に触れることのよさというの、私たちも思っているんですけども、先生ご自

身はどう思っているのでしょうか。

林 中学生のときに、「今自分に起こっている不幸というものはありふれた不幸だ」と知ることができたのは本の効用だと思っているんですね。今、中学生の子が自殺したりする理由の一つに、自分だけがこんな目に遭っていると感じてしまう世界の狭さがあると思いますが、本というのは、実は「そんな不幸はざらにあるんだよ、あなたの悩みは古今東西こんなにあるんだよ」ということを教えてくれる。これはすごく大きなことだと思っっているんですね。

そして、今の子供は一人でいるのを嫌がりますけれども、私は、読書というのは孤独でいることが決して惨めに見えない唯一のものだと思っています。一人でスマホをしている姿と一人で本を読んでいる姿とどっちがかっこいいか。読書は、一人でいることが決してつらく感じない行為だかなと思っっていますし、本を読んでいると違うと思うんですよ。やっぱり楽しいじゃないですか。

でも、読まない子供に言ったって「あっそう」という話ですから。私の子供が全然読まない。本を読んでいるところを見たことがない。

編集部 でも、そのうち読むかもしれない。

林 いや、もういい年ですから、読まないと思います。

この十年間、文字・活字文化推進機構の委員など三つ四つやって、頼まれて新聞や政府系の委員とか、子供に本を読ませるにはどうしたらいいだろうかということにずっと関わってきて、「親が読んでいるところを見せるといいと思いますよ」「親の本棚に本があつたら絶対読むようになりますよ」と言っていたけれども、自分の子供を見たら違うなど。読まない子には何を言っても無駄で、十年間、委員として取り組んできたけれども、読む子供は全然増えていないし、ちよつとむなしくなっていますね。

だけど、文藝春秋の「オール讀物」の編集長から、「高校生直木賞」というのに日大の付属校の方も出てくださいますと言われたんです。高校生がダイベートをして直木賞の候補作から「今年の一作」を選考するんです。なぜこの本がいいのか、自分はこの本がこういう理由で好きになったんだということを言っつて、地方予選大会のブロックごとに互選された十数校の代表が東京に出てきて、そこでまたダイスカッションというダイベートをしていくんですね。

編集部 ブックトークのダイベートみたいなものですか。林 そうです。「オール讀物」の編集長が、「林さん、ずつ

と直木賞の選考委員なんだから、生徒さんもぜひ」と言われて、付属の高校生に参加してもらったら、すごく優秀で、全国大会まで残りました。ふだん会わないような他校の生徒たちと本のことで話し合ってみたくちゃ楽しかったとうちの付属の女子高生が言っていたそうです。参加させてよかったな、今後も続けてほしいなと思っています。本のことを語る仲間がいる、これも楽しいかもしれないです。

編集部 そういう学生や若者がどんどん増えるには、こういう世の中になつていったらよいとお考えですか。

林 今、本を読む子と全く読まない子と両極端で、読む子は何も言わなくても読むんですよ。全体の数はもちろん減っていますけれども。そういう子たちが変にマニアックになつているので、マニアックにならないで、もっと気軽に本を読めばいいんじゃないかなと思います。

編集部 それはどうしたらいいのか。

林 日常的に本を読むんですよ。有名人がもつと本を読む楽しさを発信することじゃないですかね。

編集部 学校では朝読書の時間を設けていますが、嫌がる子は本当に嫌がるんですよね。

林 中学校でもやっつているんですか。小学校ではやっつてい

ますよね。

編集部 ずっとやっています。

編集部 授業中に、朝読書の本を机の下に隠して読んでいる子を見ると、かわいいな、本当に本が好きなんだなと思います。だから、あまりそれは叱らないで、「何を読んでいるの。」とそつと聞くんです。

林 途中でやめられなくなつたんですね。いい話です。

編集部 先生はご著書で、例えば柳原白蓮だったり、渋いところで真杉静枝だったり、下田歌子、スカレット・オハラ、お母様も含めてですけれども、様々な女性を取り上げていらつしゃいます。そうした小説のモデル、特に女性のモデルはどのように選んでいらつしゃるのか、お聞きしたいなと思っていました。

林 柳原白蓮の場合は、「婦人公論」から依頼されたときに、今はもうない中央公論社のビルの資料室で大正時代のバックナンバーから調べていって、もちろん柳原白蓮の名前は知っていましたけれども、この人、面白いなと思って書きました。

あと、「この人どう?」と出版社のほうから提示して来ることも多いですね。真杉静枝は、新潮社の斎藤十一とい

う有名な編集者から私に書かせると、御下命が下って書くことになりました。企画として出版社から来ることもあり
ます。

編集部 眞杉静枝は、先生の本で初めてそういう女流作家
がいたことを知ったんですけれども。

林 武者小路実篤の記念館へ行ったら、年譜から名前を消
されているんです。実篤の愛人であり、その指導を受けて
小説家になった人なのにひどいですよ。

同じく小説家の中山義秀とは正式に結婚しているんだけ
れども、やはり年譜から消されています。

編集部 消したい過去なんです。

ご著書の『白蓮れんれん』もそうなんですけれども、よくこ
れだけの資料を集めて、毎週毎週エッセイもたくさん書か
れている中で、どうやって資料を読み込んで、しかもそれ
を生かして小説にされているのでしょうか。

林 編集者の人が集めてくれるんです。

編集部 でも、読むだけでも大変ですよ。

林 マーカーをつけた分だけ読んでねとか言われているん
ですけれども、全部読みますね。読むのが速いから。今は

日大の仕事でいっぱいですから、読む時間は全くないです
よ。資料を読めと言われても読めない。

編集部 速いというのは、ご実家が本屋のときに棚にある
ものをさーっと読んでいたからですか。

林 それもあるけれども、本好きだと固まりで文字を読ん
でいくんだと思う。私も、ちゃんと読んでいるのかと言わ
れるぐらい速いです。

編集部 これが面白いから書いてほしいという編集者の方
の依頼で膨らませていくのと、自分がこれを書きたいとい
うのと二つあるんですか。

林 ありますよ。その時々ですけれども、出版社の人が言
うときもあるし、こちらが言うときもあるし、半々かな。

編集部 スカーレット・オハラはどっちですか。

林 編集者からです。訳してほしいと。今もいろいろお話
をいただいています、この人をやりませんかとか。

編集部 いろいろな提案があつて、これは書きたいなど
思つて一致したものの中でどんどん進んでいくんですか。

林 あまりやりたくないなど思つて二年ぐらい転がしてい
たのが、書かざるを得なくなったものもあります。

編集部 若い頃の作品は、OLや女子アナなど、その時代を象徴するような女性を取り上げることが多かったと思いますが、最近は歴史小説とか時代小説が多いなど思うんですけども、何か変わってきたものがあるんですか。

林 歴史物の書き方が分かってきたし、好きだなと思うのもあるんですが、『西郷どん!』のときもグループでやって面白かったのですが、その前に徳川慶喜を書いたんですけども、これがすごく面白かったですね。それで、その時代を書く資料がたまっていますので、これもやってみたいなと思って、維新の頃、幕末の頃を書いたんですけど、皇族物が好きで、皇族の資料をずっと持っていたので、それで『李王家の縁談』を書きました。

でも、私はノンフィクション作家じゃないので、やっぱり現代を書いていかなければいけないわけです。親しい編集者から、「八〇五〇という社会問題があるから、これについて書いてほしい」と言われたんですね。八〇代の親と自立できない五〇代の引きこもる子が同居する世帯が孤立してしまう社会問題です。何年も一緒に仕事をしてきた編集者と初めてのの人とは全然違いますけれども、彼女とは何

十年も一緒にやってきたし、編集者というのはパートナーです。彼らにもいい思いをさせなければいけないわけですよ。どういふことかというところから持ちかけた本が売れなかったときは、向こうから持ちかけてきた本でベストセラーを出さなければいけないんです、たまにはね。社長賞ももらってもらいたいので頑張るんですけども、『小説8050』はそんな感じで書いて、NHKで二回も取り上げられたこともあってとても売れましたので、よかったなと思います。ああいう現代物も書いていかないと、作家としては体力が弱まっていますので。



編集部 すごくジャンルが広がって、歴史小説もあれば、今の『小説8050』みたいな現代物があって、OL物があって……。
林 『最高のオバハン』というシリーズもあるんですが、これは「中島ハルコ」というふうにずいぶんおばさんを書いて、この間ドラマになって、今度お芝居

になります。

編集部 大地真央さんが演じていましたね。

編集部 ジャンルの広さというのは何かあるんですか。

林 何を書いても割と書けるという自信があるのと、昔から決めつけられるのが嫌いで、いつも講演会なんかに行つて、若い女性の恋愛小説を書いていると紹介されると、私、それだけじゃないんですよという感じで腹が立って、ちよつと違うことをやりたいなど。

編集部 瀬戸内寂聴さんにいろいろなことを教えてもらったとか、渡辺淳一先生にいろいろなところに連れていってもらったとか。

林 かわいがっていただきましたね。

編集部 そこからどんなことを吸収されたんですか。

林 寂聴先生はいろいろなことを教えてくれましたね。作家は書いて何ぼだし、死ねば次の年から消えていくのよとよくおっしゃっていた。寂聴先生とは気が合った——気が合ったなんて言うとおこがましいですけども、かわいがっていたかったです。

田辺聖子先生は優しいというか裏表がない、温かい方で

した。宮尾登美子先生も好きでした。

編集部 だんだん代が替わって、逆に大作家になられて、若手を育てていく。

林 大作家とは思わなければ、私があの人たちの年齢になつたなと感じます。直木賞の選考委員で一番古手になつたんです。この間まで一番下座で震えていたのに、びっくりですよ。月日が経つのは早いものだなと思いますが、若い人を育てようなんてちつとも思っていないし、仲よくしようとは思っていますが、別に悪い関係じゃないけれども、一緒に飲みに行つたりとかはしないですね。

編集部 文学賞の選考委員会や協会の大任になつたり長になられて、そういう立場になつてくると、いろいろなことを考えて後輩を育てるとか、でも、それは考えなくても身に付いているんですかね。

林 後輩を育てようなんて全然思いません。だつて、出てくる人は出てきますから。今は書生なんていう制度もないですし、才能がある人は選考会でも褒めたたえて応援しているだけで、ライバルになりそうだから落とそうとか、そういうことは考えたこともないですし、そういうことを

考えたら選考委員をやってはいけなと思っていますので、すごく公平だと思います。だから、慕ってきてくれる人とは仲よくしているけれども若い作家と定期的に飲んだり食べたりはないですね。

編集部 交友の範囲が広いので、そういうものがあるのかなと思います。そうでもない。

林 むしろもっと違うジャンルの若い人とお付き合いしています。

編集部 作家とか、そういう世界じゃない方たちとの付き合い合いですか。

林 そのほうが多いかもしれないですね。「エンジン01文化戦略会議」という文化人の団体の幹事長をずっとやっていたので、その流れで交際範囲も広まりました。

編集部 『成熟スイッチ』の一番最後に、自分の世界とは違う世界の人と付き合いなさいと書かれていましたね。

林 よくあるのが、最近の若い作家さん、私も若いときはそうだったけれども、編集者とか付き合い合わないで、お酒も御飯もいつも編集者で行っている。ああいうのはちょっとよくないなと思って、よく若い作家をエンジンの活動な

んかに誘うのね。そうすると、みんな他のメンバーを見て、めっそもないと断わるんです。

編集部 あそこはジャンルが広いというか、各界の一流の方たちが会員ですからね。

林 作家が少ないので入れようと思うと、みんな嫌と言います。

編集部 ちょっと話が変わりますけれども、今の日本の大学生を見ていて、ここはすごいと思うこと、あるいはもう少しこうなっていたほうがいいんじゃないか、そういうことは理事長から見てもありますか。

林 今の学生は、私たちの世代から比べるとすごく勉強しているなと思って感心しています。時々キャンパスを見に行ったりすると、どこでもみんな予習したりしていて、本当によく勉強するみたいです。

日本の学生はグローバルな視点がなかなかもてないというの、私たちの頃はもっと英語をやって世界に飛び出そうというのがあったんだけど、それがちょっとしぼんでしまっ、非常に内向きになっているなと感じます。もちろん、海外に目を向けて、向こうの大学に行つてどうこ

うしようという学生もいるけれども、それは一部なので、もつと普通の学生が夏休みにリュックをかついでいろいろなところへ行ったりしてほしいなと思うんです。それと、映画、音楽だけでなく、海外の本を読んでもつと深いところから海外のことを知ろうとするとか、そんなふうになつてほしいなと思っています。

編集部 地理的には海に囲まれた島で、内向きな部分というのがあると思います。

林 本当に内向きですね。私はバブルもその前も経験しているのですが、本当に今の若者は元気がないなと残念です。

編集部 あの頃はほとんどん海外に行っていましたよね。私もバックパッカーだったんです。リュック一つつかついで、アフリカと南アメリカ以外は大体行きました。世界は広いじゃないですか。

林 そういう学生がもつと増えてほしいと思います。そういうことが単位として認められるとか、何かしたいけれども。

編集部 海外に何週間か行ったら、レポートを書いて、それで単位を取れるとか。

林 うちの大学もこれからグローバル化を進めていこうというところで組織もつくっています。

編集部 何かグローバル化に向けた戦略があるんですか。

林 英語ができないことにはどうしようもない。英語はツールですから。私はツールを持っていませんが、私の周りの人は、エンジニアも建築家もアーティストも学者さんもみんな普通にそのツールを持っている。持っていることはすごいんじゃないかと、スマホを持っているのと同じくらい「えっ、何が特別なの？」という感じなので、若いときから持っていないとこの感覚はないだろうなと思う。努力して身に付いたものじゃなくてツールだから。

編集部 それを身に付けることがグローバル化して世界とつながる一歩で、あとは自分の専門分野で仕事をしていけばいいですね。

林 私の周りには、英語ができるのが当たり前で、それで仕事もできるという感じだから、羨ましいなと思う。

編集部 本を読んでほしいというのと、手段として英語をしゃべれるようになる。そこはきちんと日本人はこれから身に付けていかなければいけないでしょうかね。

林 そう思います。ツールは持つてほしい。

編集部 私も、日本人は安定志向だとか内向きだとか、外に行かない学生が増えてきたなと思うんですね。

林 そう思いますよ。だって、事足りちゃうもの。日本は安全です。別に苦勞してつらい思いをしなくてもいいわけですし、言葉が通じないところで四苦八苦する必要もない編集部 そうやって、恵まれている、あえて冒険はしないという中で、日本の大学生も含め、中学生の自尊心、自己有用感が非常に低いと言われている、それはなぜなんだろうと。

林 やっぱり先生だと思っんですね。先生の一言というのは本当に大きいと思います。

私は中学校ではさえない子で、勉強はできないし、いじめられるわ仲間外れにはされるわ、その代わり変にプライドはあって、どこかで変に自信があって、何で私のよさに気付かないのかしらみたいに勘違いしていた。私はほかの人とは違うんだとか、何で思っていたのか分らないんですけれども、「私は今にすごい人になるんだから」みたいなことを思っていて、それですますます嫌われているような

子だったんです。子供は敏感だから、担任の先生も私のことを嫌っているなと何となく分かったんですね。もてあましているなど。

それでどんどんいじめていったんですね。高校に入ったら人気者になったんですね。体育の先生が担任で、いまだにお付き合いがあるんですね。私のことをかわいがってくれて、卒業のときに、「もしこのクラスから有名人が出るとしたら林だな」と言ったんですね。おまえは本当に性格がいいとか何度も言ってくださって、その言葉が黄金のように私の中で生きていて、その後、就職がでさなくてつらい時期も、ずっとその先生の言葉を思い出して、高校のときに先生が自分のことを認めてそういう言葉を言ってくださったということが物すごい自信になっているんですね。

そう思うと、中学の先生たち、心にもないことを言えというわけじゃないんですが、要所要所でそういう言葉をかけてあげたら、子供は恐らく先生たちが考えているよりずっと先生のことを見ているし、私もそうだったけれども、言葉は残っていると思うんですね。ガラスのような少年少

女たち、私だったら中学生を教えるなんて怖くてできない。でも、何か言葉をかけてあげることができないんじゃないかなと思います。

編集部 その子のよさとか可能性とか頑張っていることを認めたり励ましたり促したり、それが自信になっていくんですね。

林 先生たちが考えていらっしゃる以上に子供は覚えていると思います。

編集部 ちよつとした言葉だけでも、一生残る言葉というのがきつとあるんでしょうね。

林 そうなんです。

私、中学の同窓会には行かないもの。高校の友達は今仲がよかったので集まったりするんですけども、中学で来てよ来てよと言われても、あの子とあの子がいるんだっただけ行かないと。

編集部 お嫌なんですわね。

林 謝りたいって言ってるよとか聞くのですが。

編集部 今さら言われても。

先生たちが励ましの言葉をかけるとか認めてあげる。こ

のインタビューを校長先生たちが読んだときには、ああ、そうなんだといういい言葉になると思うんですけども、今の日本の教育のよさというのはどう思うところだと思いますか。

林 協調性を身に付けさせる、それはいいことでも悪いことでもあるけれど、悪いことだけではないと思いますよ。みんな生きていくことの大切さを教える。一人が目立たない。だから日本はというけれども、決して悪いことではないと思うんです。だって、個性というけれども、個性的に生きていくのは大変なことだもの。

私は自分でそんなに変わっている人間だなんて思っていないんだけど、子供るとき、変わっている変わっていると言われたんですね。それでいじめられたりしたんですが、自分でどこが変わっているのか全く分からない。そういうふう生きていくことのつらさというのはあるわけで、個性的に生きていこうとか言うんだけど、そのしんどさというのがあるわけですよ。

個性というのはいいかげんなものですから、個性的に生きようと思っただけ生きていけるわけじゃない。みんな押

しなべて普通に生きていこうと思う中から、成長するにつれてむくむく出てくるもの、それが個性だと思っただけですね。だから、最初はみんな仲よく普通に生きていこうという日本の教育は決して悪くないと思っています。個人的にどんどん前に出ていこうというのは高校生ぐらいからやればいいことであって、それでも普通といわれる枠からはみ出していく子はいっぱいいるわけです。そういう子たちは否定しないで大切に伸ばしてあげればいい、最初から個人的にがんがんやろうよというのとは違うと思います。まずきちんと人間として身に付けるものを身に付けて、勉強することを教える。

十何年ぐらい前に言われていたのが、団塊の世代の親たち、今七〇代半ばから後半、その人たちの子供が、私も知り合いがいるんだけど、不登校が多いんですね。つまり、彼ら団塊の世代、勉強しなければ駄目だとか、いい大学に行かなければ駄目だと競争させられた世代は、自分の子供たちを個性的に伸び伸びと育てたいとか、そういうことを言っていた。その結果、子供たちはどうなったかという、物すごく不登校を増やしてしまったということが

あるんです。

あれから二〇年近く経って、とにかくきちんと勉強させる、朝ちゃんと登校して、ルールの中で学校生活を終えるということ教えることは決して悪いことじゃないと思っています。

編集部 それが人間のベースになっていく。それを学校教育で身に付けさせることが大事ですね。

林 それを最初から否定したりするようなことは違うと思います。

編集部 団塊の世代というのは、大勢の中でいろいろなことを競争させられたり詰め込んだりして、親になったら、自分の子供にはそれだけはさせたくない。

林 その考え方で失敗した人は多いと思いますよ。どうなっていくか分からないけれども、中学生まではきちんとベーシックなものを身に付けさせるというのは大切なことだと思っています。自分の子供にも、きちんとベーシックにやっつて、それでもはみ出したらしようがないと思っています。

編集部 私たちは公立の中学校ですけれども、今の中学校

教育がこういうふうになつたらいいなと、中学校教育に望むことというのはどんなことがありますか。

林 私は現在の公立の中学校を存じ上げないので、具体的なことは申し上げられないですけれども、今、中学受験が盛んで、私が住んでいるところの多くの児童は中学受験をする。何で公立へ行かせないかというところ、いじめがあるとか、皆さんいろいろなことを言うわけですけれども、公立のよさというのもあると思うんです。だから、公立の中学の子たちに、君たち、受験に落ちたんだねとか受験でできなかったんだねということはみじんも感じさせてはいけません。都心の子はちょっとそういうところがあると思います。公立ならではの魅力がきつとあるような気がするんですよ。

この頃お会いするのは私立の先生たちばかりなので、うちはこういう独自の取組をやっていますということをお話してくれそうです。私立はそれが売り物です。公立は校長先生の個性でいろいろおやりになるんでしょうけれども、それはほとんど進めてほしいと思いますね。

今は大変だと思う。部活をやるのだから、コーチや監督

は誰がやるんだとか、うちの付属校の先生の話を聞いていただけで大変ですから、公立だともっと大変だと思う。それでも、子供たちに、公立に進んだのは賢い、とてもいい選択だったと思わせてほしいなと思いますね。

編集部 平等に物事を扱ったり、全体的な基準にしっかりと基づいて、地域にも応援してもらいながら、地域を大事にする気持ちも育っているし、いっぱいいいことはあると思うんですよ。

林 家の近くに友達がいるということは大きいと思います。行き帰りの友達がいる、地元の友達がいるというのは大きなことだと思いますね。そのよさはあると思います。

公立の中学から広がる豊潤な高校の選択肢というのも魅力だだと思います。一貫校へ行くことと狭まるわけですけれども、公立の中学へ行くこと……

編集部 いろいろな人が集まってきて、そのよさとか豊かさ——豊かさというか多様性、そういうのはありますよね。

林 私立へ行つた子は地元で友達がいなくてかわいそうなんです。

編集部 学校教育はこういうことに自信を持ってやってほしいというエールをいただいたんですけれども、今の中学生に大切にしてほしいことというのはどんなことがありですか。

林 さきほど、自己肯定感が少ないというお話がありました。自分がかけがえのない存在で、両親から愛されて育ってきたことを知っていてほしい。いじめとかいろいろなことがあったとしても、人生は幾らでも新規まき直しできるんだよということ伝えたいです。

この間、すごくいい話を聞いたんです。先日シンポジウムに出たら、ノーベル賞をもらった先生がいらっちゃって、その方が、「三五歳になったときのことを想像してみなさい」と言っていていらっちゃったんです。三五歳にどんな大人になりたいか、どんな仕事に就いてどういうことをしたいかということ想像すれば、おのずから今の自分が客観的に見えてくるとおっしゃっていました。でも、中学生で三五歳の自分を想像するのは難しいことですね。

編集部 二〇年先ですよ。

林 だけど、今言ったみたいに、「あなたはかけがえのな

い存在で、お父さんとお母さんから望まれて愛されて生まれてきたんだ。今、友達関係はちょっとついてないかもしれないけれども、今ここが君の全ての世界じゃないんだよ」と言いたいですね。「もしつらいことがあったら、大人になってこのつらい日のことを話す日のことを考えてみようよ」と言いたいと思います。勉強はしておいたほうがいいです。勉強は最低限ちゃんとやりましょう。それでも、もし面白いものがあつたら、今のうちに好きなもののためにおくというか磨いておきましょう。

編集部 好きなことを自分の中に取り込む。

林 好きなことがだんだん光ってくるはずだから、それを磨く時間にしてほしい。それから、本も読んでほしい。本もたまには読みましょうということですかね。

中学というのは本当に大変だと思う。私もあまり思い出したくない暗黒時代です。本当に自己肯定感が低い。中学で急に女子生徒は差が出てくるんですね。小学校は一緒だったのに、いつの間にこんなにきれいになって追い抜かれてしまったんだろう。そこで男の子によって順位をつけられてどんどん落ち込んでいったりする。非常に多感な年

頃で、高校生になるとまた順位が変わっていくんですけれども、そういうワンシーンだということ、ワンシーンにすぎないんだということを知ってほしいなと思います、特に女子生徒には。

編集部 また違う世界が何年後かにはある。

林 シーンが転換されていくから面白いんです。まだ中学生で分かるはずもないけれども、どこかでまた変えればいい。
編集部 先生の著書を読ませていただくと、いろいろなジャンルの方との御縁がある。今お話もありましたけれども、幼少期からそれほどいろいろな方とお付き合いをされていたわけではなくて、どちらかというと本が友達。でも、年を経て、いろいろな機会があり、対談をし、その一瞬ではなく、ずっと御縁をもたれていらっしやるからこそ、いろいろなものを書けたりできるのかなと思うんですけれども、御縁のつくり方というか、初めは人見知りだったと書いていらしゃるんですけれども、人見知りだったらあまり広がらないかなと感じるんですが、そこからどんなふう
に……。

林 人見知りというのは途中からなくなったんですね。

今は、対談したりして今日は楽しかったなと思うと、大体向こうからLINE交換しようよといってくたさるので、LINEを交換して、御飯を食べましようといって御飯を食べて、楽しいね、定期的に会おうねといってまた何人か連れてきたりして、そうするとどんどん広がっていくところなんです。最近はそのような流れが多いので、直感的にその人に面白い人と思わせることが大切だと思うし、このチャンスはLINEでつなげようという気持ちがあるんじゃないですか。

スマホができてからとても変わりましたね。そういうもので縁をつないでいって、自信をもてればどんな縁だっかってできていくと思っています。

編集部 今の子供たちは、何となく限られたコミュニケーションとか、なかなか広がっていかない。大人のほうから手を差し伸べて、あれがあるよ、これがあるよ、行ってみようって、しゃいみたいになっています。

林 子供たちがスマホで変なものをつながってしまうことがあるじゃないですか。あれが怖いですよ。ちゃんと目に見えるものをつながらなければいけないわけで、さっき



言ったように、公立の強みはそこで、帰ってからの仲間がいるというところはすごい強みだと思う。私立の子はいないですよ。一人で帰ってきて、土日とか決められた日に決められた人のうちに遊びに行く。公立に通うよさというのはそういうところじゃないかなと思うんです。手に触れるものがきちんとあるというのはとても強いことだと思うので、そこから広がっていかないといけないと思っています。ネットの中のことは本当に気を付けてほしいなと思います。

編集部 子供たちに、小さなところから一つずつ広がっていくように言いたいなと思います。

林 子供でそんなに広い世界をもっていたら不気味ですよ。まずは地元の中でいいと思います。

編集部 今日は、一時間という中で幅広いお話をいただいて、最後、中学校教育や子供たちへのエールもいただきました。貴重な機会をいただきました。ありがとうございます。

*本インタビューは、令和五年七月二十五日に行いました。日本大学の様々な改革に精神的に取り組んでいらっしゃる中、中学校教育への思いや期待を込めて、豊かな知見と鋭い慧眼でインタビューにお答えいただきました。

(編集部長 佐藤 太)